『ジェイン・エア』試論

人，全世界を儲けるとも，おのが生命(いのち)を
損すれば，なんの益あらん。
マタイ伝　16：26

林　完枝

I　「名もなく貧しく美しく」

登場人物の内面を尊重するがゆえに彼らの心理の奥深くに立ち入らないとするのがジェイン・オースティンの態度とすれば、個人の内面を尊重するからこそ、否、物語るに値するのはまさに内面心理、魂の深さと信じたればこそ、inner self の「成長」、発展を描写するというのがシャーロット・ブロンテの立場となろうか。これは余りに粗雑な二分法ではある。先ずここで確認しておきたいのは、シャーロットは、ヴァージニア・ウルフの評言を借りれば、ヒロインに"I love," "I hate," "I suffer"[1]と叫ばせる作家であるということ。もう一つ、オースティンには欠けていた女性の labour という問題がシャーロットの作品でクローズアップされているということ。第一の点について付言するならば、シャーロットのヒロインは表面をいかにつくろおうとも内には激しい情動を秘めており、かつその語り口も激しいということだ。妹アンの『アグネス・グレイ』における同名ヒロインの一人称による語りは、[2] ジェイン・エアの一人称の語りとはピッチもトーンもまるで異なり（それはヒロインの、ひいては作者の資質によるところ大であるが）、激しい感情の吐露は、一人称の語りというより寧ろヒロインの性格造型に帰せられるべきである。とまれ、シャーロットの作家としての面目躍如たるところは、一人称でヒロインがこれでもかこれでもかとばかりに自らの苦境を語る ── 殆ど信仰告白の境位に達するほどに ── その語り口の激しさにある。『ジェイン・エア』も『ヴィレット』も一人称の語りなればこそインパクトがあるのだ。言うまでもないことだが、ジェイン・オースティンもそしてジョージ・エリオットも、ヒロインの一人称の語りで小説を書くことはなかったのである。

イヴァ・フィッジズは、オースティンの死から三十年ほどの間英文学史にこれといった優れた女流作家が現れず、突如1847年にブロンテ姉妹が文学シーンに躍り出た、と言っている。[3] シャーロット・ブロンテについて論ずるにジェイン・オースティンの名を先ず出してしまったが、シャーロットは『ジェイン・エア』出版以前にオースティン作品を読んだことはなかった。G・H・ルイスに薦められて初めて読んだわけだが、シャーロットはオースティンに感心しなかった。自分の創作原理と何とかけはなれていることか。自作との違いを再確認するばかりであった。そこには、自分の小説の方が遥かに「人間の真実」にかなっている、というシャーロットの自負が読みとれよう。[4]

レイモンド・ウィリアムズによれば、" passion," "the intensity of the feeling" を強調する作品は英国小説の歴史において新しいという。[5] だから作家の資質の相違では済まされぬ事情が社会史的文脈の中にはあるのだ。その「新しさ」はヴィクトリア朝読者には必ずしも快く受け入れられたわけではないが、だからこそと言うべきか、ブロンテ姉妹の作品、とりわけ『ジェイン・エア』は版を重ねたのである。

> Women were not supposed to feel or show violent emotions,or to fall in love without encouragement , or to defy men, and Brontë heroines do all these things.[6]

それを裏づけるように、シャーロットはジェイン・エアを代弁者として主張するのである。

> Women are supposed to be calm generally ; but women feel just as men feel ; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do ; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation . . . It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or

learn more than custom has pronounced necessary for their sex. (I, xii)[7]

かくして、ブロンテのヒロインは従来伝統的にまたは因襲として「女らしさ」と看做され是認されてきた「らしさ」の美学から外れている。否、外されてしまったのだ。こうしたヒロイン設定に、シャーロットは当然自覚的である。というか、意欲を示している。

I will show you a heroine as plain and as small as myself, who shall be as interesting as any of yours.[8]

これはまた、ロチェスターへのジェインの激しい問いかけに呼応するものである。

Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless? — You think wrong? — I have as much soul as you, — and full as much heart! And if God had gifted me with some beauty, and much wealth, I should have made it as hard for you to leave me, as it is now for me to leave you. I am not talking to you now through the medium of custom, conventionalities, nor even of mortal flesh! — It is my spirit that adresses your spirit. (II, viii)

"Poor, obscure, plain and little" なるハンデを負った女性の soul や heart を書くこと、これが小説家シャーロット・ブロンテの責務となったのである。したがって、シャーロットのヒロインは、ファニー・バーニィやオースティンのヒロインのような類の結婚はしないし、できない(『エンマ』のあの冒頭を思い浮かべてもみよ)。貧しさゆえに自活を余儀なくされるから、先達のヒロインがおよそ知らなかった labour の苦渋を味わうことになる。縁故にも美貌にも恵まれぬゆえ、よりどりみどりの求婚者に取りまかれることもない。自分ではどうにもならぬこうしたアプリオリな境遇及びその境遇ゆえに社会が個人に押しつける役割や価値観に、個人はどう対処しうるのか。経済的な自立を得るためには、隷従的な労働につくほかはないのか。自我の独立は、愛や結婚といった他者との親密な関係に入れば壊されてしまうのではないか。sexual passion と morality とは両立するのか。ここにヒロインの psychosexual development を主題とする小説の誕生が予見される。[9]

『教師』が地味すぎて出版社側の意向と合わず刊行を却下され、それならばとシャーロットは出版社好みの "startling incident," "thrilling excitement" にみちた小説を書くことになった。[10] とはいうものの、彼女の若書きから明らかなように、出版社側の要請と彼女の文学的嗜好が必ずしも合致しないわけでもなかったのである。[11] なかでも、ジェイン・エアが住み込みの家庭教師として勤めることとなった屋敷にまつわる犯罪と狂気の物語は、ことのほか読者大衆の好奇心に訴えるような派手な舞台装置に事欠かない(出版社が求めていたのは、物語の派手な仕掛けであって、語り手の性格づけや文体ではなかったように思われる)。

「自伝」と銘打たれた『ジェイン・エア』は先ずおばの家 Gateshead-hall での辛い子供時代の記憶で幕があがる。十歳のジェインは天涯孤独な身の上で母方のおばリード夫人宅に居候している。リード夫人はジェインを嫌っている、その息子ジョンはジェインをいじめる、その娘ジョージアナとイライザはジェインと仲よくしてくれない。召使いたちもジェインに気を遣ったりしない。両親の記憶すらない、当然親に愛されたという思い出もない。ジェインを可愛がった(そのせいでリード夫人はジェインを憎むことになる)というおじリード氏もすでに亡い。孤立無援である。可能な限り不幸な子供時代の枠組を考えついたのである。まさに "poor, obscure, plain and little" である。だが、驚くべし、十年後にはジェインは、"poor, obscure, plain and little" といった属性をすべて捨て去ることができるのだ。なぜ、そんなことが可能なのか。ジェインが経験を積み人間的に成熟したせいで? "poor, obscure, plain and little" という最初の状況は人間的成長によってその反対物に転化しうるのか。もしそうだとすれば、内面的な成長と幸福(社会的場または家庭的場での)とは相関関係にあるということか。そうなれば、小説はモラルやアレゴリーの様相を呈することになりはしないか。

ゲイツヘッドで一緒にいても厭な思いをしないですむ相手は子守女のベシーくらいなものであるが、ジェインとベシーは社会的にはおよそ対等な「身分」ではないのであるから、ジェインには大した慰めにはならない(ベシーの役割は寧ろゲイツヘッドを離れてからのジェインに、その後のリード家を見舞う不幸を語ることにあるのだ)。孤児という設定はしかしながら不幸ばかりをひきよせるわけではない。[12] 家族の桎梏からアプリオリに免れさせてくれるのだから。身内の情愛にほだされる必然性はない、足をひっぱる親兄弟はいない。頼るべき家庭が

ないとは家庭内のいざこざに巻きこまれる可能性はないということであり、ある意味では気が楽なのだ。失うものは鉄鎖のみ、と腹をくくれるのである。まして、ジェインとリード家の人々は互いに嫌いあっているのだから、ゲイツヘッドにジェインをひきとめる何ものも存在しないのである。ゲイツヘッドは住むに値しない場所であり、そこの住人たちは愛にも尊敬にも値しない人々である。ジェインは次のようにリード夫人に抗議する。

'I am glad you are no relation of mine : I will never call you aunt as long as I live. I will never come to see you when I am grown up ; and if any one asks me how I liked you, and how you treated me, I will say the very thought of you makes me sick, and that you treated me with miserable cruelty.' (I , iv)

この類の非難を十歳の姪から投げつけられるリード夫人の心中は察して余りある。憎悪の相乗効果とでもいおうか。ジェインがブロックルハーストの経営するローウッド・スクールに行くのは、リード夫人にとっていい厄介払いを意味するが、またジェインにとってもリード家と縁が切れて爽快であろう。

Gateshead から Lowood へ。それはまたジェインの heathen から Christian への成長ともとれる。（この小説では、主人公の成長のプロセスが場所の移動、したがって環境改善で示されることに注目していただきたい。）語り手ジェインが回想するように（ I , ii)、子供の頃のジェインは見栄えもせず可愛げのない性格だったから周囲の人々に好かれなかったのも当然かもしれない（殊勝な反省ぶりである)。ジェインは他人から受けた屈辱や苦痛を決して忘れない、*vindicta mihi* と言わんばかりのいきおいである。いわゆるキリスト教的忍耐に欠けていた。ローウッドで彼女が学ぶのはキリスト教的忍耐なのである。それは偽善的な教育者ブロックルハーストから学ぶのではない。ジェインはこの学校で初めて愛と尊敬に値する人間に出会うのである。すなわち、学友ヘレン・バーンズと教師ミス・テンプルである。この二人は、リード家の人々やブロックルハーストとは比べものにならぬくらい優れた人格を備えている。だからこそ、ジェインは彼女らを認めるのである。

'... I must dislike those who, whatever I do to please them, persist in disliking me ; I must resist those who punish me unjustly. It is as natural as that I should love who show me affection, or submit to punishment when I feel it is deserved.'

'Heathens and savage tribes hold that doctrine, but Christians and civilized nations, disown it.'

'How ? I don't understand.'

'It is not violence that overcomes hate — nor vengeance that most certainly heals injury.'

'What then ?'

'Read the New Testament, and observe what Christ says, and how he acts — make his word your rule, and his conduct your example.' (I,vi)

ジェインとヘレンの対話のごく一部である。ヘレンによる感情教育はある程度まで効を奏する、ヘレンが定義するところの Christian そのものとまではいかないにせよ。ジェインはブロックルハーストからゆえない非難を浴びせられて一時は完全な孤立かと悩みもしたが耐え忍び、その誤解がミス・テンプルの好意と尽力によって解けたあと、彼女は勉学に励み、学友の信頼も得るようになる。ローウッドスクールにチフスが蔓延したのを機に学校衛生が社会問題化し、ブロックルハーストは解任され、学校の経営は改善される。ジェインはヘレン・バーンズを結核で失うとはいえ、ローウッドでの八年間（最後の二年は教師として過すことになる）は、誰にも愛されないというトラウマをかかえていた彼女にとって、総じて幸福であった。しかし、八年後に敬愛するミス・テンプルは結婚を機にローウッドを去る。途端にジェインは学校がつまらなくなる。彼女を理解してくれる人間はいなくなった。ヘレンは死に、ミス・テンプルも学校にいない、となればジェインを学校に縛りつける何ものも存在しないのである。彼女にとって、尊敬するに足る優れた人間が見近にいるのでなければ、自我の発現、自由はありえない。十八歳になったジェインはローウッドから広い世界に飛び出そうとする。

I remembered that real world was wide, and that a varied field of hopes and fears, of sensations and excitements, awaited those who had courage to go forth into its expanse, to seek real knowledge of life amidst its perils .... I desired liberty ; for liberty I gasped ; for liberty I uttered a prayer ... for change, stimulas : that petition, too, seemed swept off into vague

space ; 'Then,' I cried, half desperate, 'Grant me at least a new servitude !' (I, x)

では、彼女が飛び出す広い世間とはどこか、そこで求められる自由・変化・刺戟（最悪の場合でも新しい隷従）とは何か。

Lowood から Thornfield へ。

ジェイン・エアはソーンフィールド・ホールの住み込みの家庭教師として雇われることになるのである。よるべない孤児にとって、なるほど慈善学校にいるよりは田舎の屋敷で働く方が、まだしも 'to seek real knowledge of life amidst its perils' にふさわしいかもしれない（そして、プロット進行上の伏線ともなる）。ゲイツヘッド及びローウッドを主な舞台とするこれまでの挿話群の描写をリアリスティックと言いうるならば、それは先ずよるべない境涯のヒロインの感情や心理の描写に見られる尤もらしさによるであろうが、それ以上に、同時代の小説読者がローウッド・スクールとブロックルハーストのモデルをすぐにそれと知ったという事実（殆ど醜聞である）によると思われる。[13] 幼少のシャーロットが姉二人を失うことになる学校での不幸な思い出に比べれば、ソーンフィールドのネタはシャーロットにとって直接に自らの個人史に関わるものでない。[14] およそ "real world" とは言えない（ジェインとロチェスターの最初の邂逅が既にして暗示的だが）。ソーンフィールドの舞台装置は実に出版社好みでもあり、メロドラマやゴシックロマンスの独壇場ともなる。したがって、ジェインとロチェスターのラブロマンスに恰好の舞台を提供するというわけである。ジェインがローウッドを出る際に新しい勤め口に対して抱く期待と不安は実現するのである。

さて、『ジェイン・エア』全体を通じて言えることだが、この小説の主要な登場人物（一人称の語り手たるヒロインの意識に肯定的にまたは否定的にひっかかる人物）は、大別すると二種類である。即ち、悪人と善人。悪人とは、既成の社会の価値観に迎合し、社会システムからの恩恵にどっぷりつかってそこに胡座をかき、自分より社会的に恵まれぬ立場にある人を軽蔑してはばかることなく、平然と自己正当化できる人々である。男の場合、横柄づくで権威主義的、しかも裕福で社会的地位をもっているからなおのこと始末が悪い。例えば、ジョン・リード、ブロックルハーストなど。女の場合、狭量、貪欲、または美貌と家柄を武器に良縁をつかみとろうと画策する。例えば、リード夫人、その娘ジョージアナとイライザ、ミス・イングラム、バーサ・メイスンなど。悪人は、"poor, obscure, plain and little" なる属性とはアプリオリに無縁であるために、作者によって魂とか精神といった内面性は何ら賦与されない。自己をもたぬ人間＝悪人の内面など書けない —— これが作者の言い分であると思われる。悪人は当然その定義からしてジェインの敵であり、互いに嫌いあっているから、悪人に苛酷な運命が最後にふりかかったところで、それは自業自得というものだ。驕れる者は久しからずなのだ。反対に、善人とは、身も蓋もない言い方になるが、"poor, obscure, plain and little" なるジェインの理解者である。例えば、ヘレン・バーンズ、ミス・テンプル、そしてロチェスター、リヴァーズ家の三人など。判定者ジェインは当然善人の部類に入るわけだが、善人とは自分の頭でものを考えることを知っており、だから知的でかつ思いやりもある。そして、自我なるものがあるからこそ悩みも深いというわけである。社会的に恵まれず、自立の道を歩む。ロチェスターの場合のように一見社会的に恵まれているように見えても、その実は恐るべき不幸に苦しんでいる。要するに、悪人とは社会的に恵まれているがゆえに低劣である。善人とは社会的に恵まれていないが、それゆえに自己なるものがある。しかも、注目すべきことには、悪人は悪人である、社会的に失墜しようと。彼らに「成長」は許されていない。善人は善人である、金持ちになろうと。それでは、社会的に恵まれていること自体に問題がありはしないか。結果として金持ちになれば善人と認容されるのか、因果応報を旨とする世界では。事の始まりに、自分ではどうしようもない不幸に見舞われること、この不幸（の意識）が、選ばれし人に特権的に賦与される逆説的な免罪符である。不幸は額にうけた聖痕なのだ。そのおかげで、恵まれぬ善人は「成長」して、恵まれた善人となる。この原理にのっとる『ジェイン・エア』が "Calvinized *Bildungsroman*" と呼ばれるのもゆえなしとしないのである。[15]

ノースロップ・フライをもちだすまでもあるまいが、登場人物に単純なヒエラルキーがあるのは、ロマンスのお家芸ともいうべき定式である。[16] とはいえ、善悪の単純な二項対立より寧ろ人相学・骨相学の援用にこそ、シャーロットがいかに時代の刻印をうけていたか見ることができるだろう。財産、家柄、職業、容貌によって人間の中身を判断してはならない。だが、外見は内面を物語るのである。世間に流布する通念によってではなく、ただ骨相学・人相学を援用してこそ、人の内面、知性、感性は判断しうるのだ。そしておおむね、社会的に恵まれている人間の外見は内面の豊かさや優秀さをあらわすような徴をもたない。そうした主張が作家によって支持されている。ゆえに、ジェインはロチェスターの外見に惹か

れ、ロチェスターもジェインの "plain and little" なる外見を評価できる。ジェインはいわゆる美男などにはおよそ魅かれない。彼女は、ハンサムと人の言うリチャード・メイスンを一目で嫌うのである。

> For a handsome and not an unamiable-looking man, he repelled me exceedingly ; there was no power in that smooth-skinned face of a full oval shape ; no firmness in that aquiline nose, and small, cherry mouth ; there was no thought on the low, even forehead ; no command in that blank, brown eye. (Ⅱ, iii)

この嫌い方は異常なほどで、ロチェスターの外見を称揚するジェインの異常なまでの熱の入れようとのみ釣り合うのである。また世間ではロチェスターの婚約者と噂されるブランチ・イングラムをロチェスターが愛するとは、ジェインは考えない（Ⅱ, iii)。ブランチには内的自我は欠如している。したがって自分より質的に劣るからブランチには嫉妬をおぼえない、とジェインは思うのだ。ジェインは常に人間の内面を外から判断するに自信をもち、しかも過つことがない（オースティンのヒロインたちと何と異なることか)。私は独善的ではあるまいかといった思いが彼女の脳裡を過ぎることもない。世間から見れば、ジェインとロチェスターは不釣りあいなカップルである，年齢も社会的地位も財産も。しかし二人は同じ魂をもつ人間なのだ、という自信にジェインは満たされるのである。

> ... he is not of their kind. I believe he is of mine — I am sure he is, — I feel akin to him ... though rank and wealth sever us widely, I have something in my brain and heart, in my blood and nerves, that assimilates me mentally to him ..... while I breathe and think, I must love him. (Ⅱ, ii)

これが、ジェインがロチェスターへの宿命的恋を自覚し、悩みつつも表明する愛である。ほぼ同じ言葉使いを、ロチェスターはジェインに求婚する際に繰り返すのである（Ⅱ, viii)。こうなればもう、ジェインは少くともロチェスターの目には "plain" などではないし、ジェインが "little" なればこそ（彼女のファミリー・ネームと相俟って）ロチェスターは彼女を妖精や救いの天使に見たてもするのだ。あまつさえロチェスターはジェインを "my second self, and best earthly companion," "my equal," "my likeness" と呼ぶ。明らさまなまでの同類意識である。この同類意識が、愛と結婚の「口実」となる。二人の共通点とは、前述したように、不幸な過去である。特権的な不幸。

我々はすでにジェインの最初の十八年間、彼女の境涯、気性、ものの考え方などを、ゲイツヘッド及びローウッドでの生活にみてきた。一方、ジェインがロチェスター本人に出会う前に、彼について彼女に情報をもたらすのは、ソーンフィールド・ホールの家政をとりしきっているフェアファックス夫人である（Ⅰ, xiii)。夫人によれば、エドワード・ロチェスターの父は金銭にきたなく、二人の息子に財産を分割するをよしとせず、長男にのみ財産を遺すことにし、次男エドワードにも財産をつくらせるべくある手段を講じた。ためにエドワード・ロチェスターは非常に辛い立場に立たされ、家族と不和になった（絵にかいたようなファミリー・ロマンスである)。今や父も兄も死に、ロチェスター家の資財はすべて次男である彼の所有するところとなったが、彼は何故かソーンフィールド・ホールに居つかない。しかし、夫人は、先代ロチェスターが次男に対してした策略の内実も、またエドワード・ロチェスターがソーンフィールドを避ける理由も語らない。知らないらしい（Ⅰ, xiii)。これは聴き手ジェイン、そして読者の好奇心をそそる効果となる。やがてジェインはロチェスター自身から彼の過去の物語を聞くことになる。先ずは余りに抽象的な語り方で ——

> I had once a kind of rude tenderness of heart. When I was as old as you, I was a feeling fellow enough ... but fortune has knocked me about since ... (Ⅰ, xiv)

やや具体的に ——

> I was your equal at eighteen — quite your equal. Nature meant me to be, on the whole, a good man, Miss Eyre : one of the better end; and you see I am not so .... Then take my word for it, — I am not a villain : you are not to suppose that — not to attribute to me any such bad eminence ; but owing, I verily believe, rather to circumstances than to my natural bent, I am a trite commonplace sinner, hackneyed in all the poor petty dissipations with which the rich and worthless try to put on life .... when fate

wronged me, I had not the wisdom to remain cool; I turned desperate; then degenerated ... (I,xiv)

我なる意識の始まりに不幸があった。ロチェスターはジェインと同様に環境や運命をもちだして自己弁護しているのだが、ジェインに（ひいては読者に）具体的な事情を説明してはくれない。このあたりは、ロチェスターの心理的葛藤と作者によるプロット展開上のサスペンス作りとが一致しているところである。ロチェスターが自らの意志に反して罪を犯してしまったらしいことを察して、ジェインは彼に悔悟を勧める。ロチェスターの返答は——

It [repentance] is not its cure. Reformation may be its cure ; and I could reform —— I have strength yet for that — if — but where is the use of thinking of it, hampered, burdened, cursed as I am? Besides, since happiness is irrevocably denied me, I have a right to get pleasure out of it ; and I *will* get it, cost what it may. (I, xiv)

彼はまだ宗教的な改悛にまで至っていない。最後の一文は伏線である。俺にだって幸福になる権利があるんだ——というわけで、彼は食器棚の骸骨ともいうべき恐るべき秘密を隠したまま、ジェインと結婚しようとする。そして失敗するのである。その時になって初めて彼は、自分の忌わしい過去、ソーンフィールドの屋根裏の秘密を、ジェインに打明ける。すでにジェインは、彼女の教え子アデールの母セリーヌ・ヴァランスがかつてロチェスターの情婦であったという話は聞いていた。しかし、結婚式が頓挫したあとにロチェスターから聞かされた話は、大陸での遊興に彼を駆りたてた原因、事の次第である。すなわち、父親が次男にも財産をもたせるべくお膳立てした結婚の相手は、酔っ払いのクリオールを母とし、しかも白痴と気狂いの家系に属する。エドワード・ロチェスターは、ミス・イングラムに勝るとも劣らぬ美貌を誇るこの女性バーサ・メイスンの色香に惑って結婚してしまう。その後の不幸な夫婦生活については多言を要すまい。彼は絶望し、バーサに監視人グレイス・プールをつけてソーンフィールドの屋根裏部屋に監禁し、自らは英国を後にした。[17] 彼とて好き好んで放蕩に耽ったのではない。フランス女性、イタリア女性、ドイツ女性を次々と愛人としながらも、満たされることはなかった。そして英国に戻り、ソーンフィールドでやっと自分と同じ魂をもつ女性を探しあてたのである（II, xi–III, i）。以上が、挙式に先立つ夜、ロチェスターがジェインに語った“Ten years since, I flew through Europe half mad ; with disgust, hate, and rage as my companions ; now I shall revisit it healed and cleansed, with a very angel as my comforter.’（II, ix）の具体的な背景、事情である。ロチェスターの過去の物語で先ず注目すべきは、彼が家族（父と兄）の強欲に利用された犠牲者であるということと、彼がその大陸での遍歴に明らかな如くバイロン的ヒーローであるということ（伊達に猿でお馴染みの放蕩詩人と同名なのではない）、この二点である。ジェインが孤児ゆえに家庭的に（そして社会的に）恵まれていないのとは正反対の理由で、名家の出たるロチェスターもまた家庭の幸福は知らないのだ。彼は通俗的な結婚制度の犠牲者である、しかも身内に裏切られたのだ。二人ともアウトカーストとしての意識が強い。ロチェスターは大陸での放縦な生活の陳腐さを自覚している。罪とは無縁な self が彼の中にはあるのだ——あるべき自己と現実にある自分とのギャップ、この自意識によって凡庸さを免れるのである。ジェインはしたがって彼を軽蔑などしない。[18] ロチェスターの大陸での情事を、ジェインは恰かもバイロンの詩の朗誦を聞くかの如く受けとめるのである。ロマン派的想像力の持ち主たるジェインにとって、ロチェスターは愛と尊敬の対象たりうる。[19]

結婚式が近づくにつれジェインは自らの“poor, obscure”な立場にひけ目を覚え、このままではロチェスターの溺愛をうける着せ換え人形も同然ではないかと懸念し、マデイラにいるおじジョン・エアに来るべき結婚と遺産相続の件で手紙を書く。これが西インド諸島在のリチャード・メイスンの知るところとなり、ロチェスターが妻帯者であることが結婚式において曝露される。ロチェスターの必死の嘆願にも拘らず、ジェインはソーンフィールドにとどまっては愛人となりはてあげくに捨てられるのがおちだと思いつめ、殆ど着のみ着のままで誰にも告げず、ただ一人ソーンフィールドから出奔する。これまでの二度にわたる場所の移動と異なるのは、今回はうしろ髪をひかれる思いで（何しろ神よりもロチェスターを愛していたのではないか、と語り手は述懐するくらいなのだから）ジェインは今までいた場所を離れるという点だ。彼には狂人とはいえ生きている妻がいる。彼女は“poor, obscure”、すなわち経済的地盤がない。妻が死んでいれば、いかに身分違いとはいえその美徳が報われるパメラとなれたろうに。彼女に財産があれば、ロチェスターにひけ目を覚えずにすんだであろうに、ロチェスターも彼女を愛人にしようなんて思いつきもしな

かったろうに。ジェインは社会が容認する合法的なかたちで神に祝福される結婚をこそ望むのである。ロチェスターへの愛に殉ずる気はない。ジェインは彼女なりに社会の慣例を尊重している。それは実はジェインの生き方すべてに及ぶのだ。“I will keep the law given by God ; sanctioned by man.”(Ⅲ,i) したがって、ソーンフィールドにとどまるわけにはいかない。

Thornfield から Marsh End（別名 Moor House）へ。

Ⅱ 「神の御名は誉むべきかな」

三日にわたる荒野での試錬を経て、あやうく行き倒れとなるところを助けてくれて、ジェインの体力が回復するまで三日間看病してくれたリヴァーズ家のセント・ジョン（またしてもジョンである）、ダイアナ、メアリーは、実はジェインの父方のいとこたちと後で判明する(Ⅲ,vii)。ジェインの父の姉が彼らの母なのである。彼ら三人は、ジェインの母方のリード家のいとこたち、すなわちジョン、ジョージアナ、イライザとは対照的に知的で優れた人格の持主である。裏返されたいとこたちと言ってもよいだろう。[20] ジェインはセント・ジョンに救われてマーシュ・エンドの中に入れてもらう前に、その家の内部を外から観察したとき、一目でダイアナとメアリーが気に入ってしまった(Ⅲ,ii)。外見は中身を物語るのだ。そして彼らと暮らすうちにますます彼らの美点を知るようになる。リヴァーズはもとは家柄はよかったのだが、今や零落している、とはいえ三人とも立派に働いているのである(Ⅲ,iii)。

ジェインはリヴァーズ家の三人が自分のいとこにあたるとセント・ジョンに啓（あか）される直前に、彼から、マデイラのおじジョン・エアが死に全財産二万ポンドがジェイン一人に遺贈されたニュースをうけている。こうしてジェインは一挙に、愛と尊敬に値する立派な親戚と経済的地盤を得るのである。もう、“poor, obscure” ではないのだ。そこでジェインは、遺産をもらいそこねた三人のいとこたちにも、二万ポンドを四等分して各々に与えることにする。[21] そうすれば、ダイアナとメアリーは意に染まぬ住み込みの家庭教師をやめて一緒にマーシュ・エンドで暮せるようになるだろう。セント・ジョンもまた、互いに魅かれあっているロザマンド・オリヴァーと結婚できて、インド行など断念して英国にとどまるだろう。新興成金のオリヴァー氏は今やおちぶれているとはいえ旧家のリヴァーズ家の人々を高く評価している（テリー・イーグルトンが好みそうな主題である[22]）。類稀な美貌を誇るロザマンドはモートン（セント・ジョンはそこの教区牧師である）一の金持ちの令嬢であるにも拘らず気立てはよい、余り知的であるとはいえないが。彼女はジェインに愛着も反撥もおこさせないので、善人でも悪人でもない。

> It seemed I had found a brother : one I would be proud of, — one I could love ; and two sisters, whose qualities were such, that when I knew them but as mere strangers, they had inspired me with genuine affection and admiration ..... glorious discovery to a lonely wretch ! This was wealth for the heart ! a mine of pure, genial affections .... Those who had saved my life, whom, till this hour, I had loved barrenly, I could now benefit. They were under a yoke ; I could free them ; they were scattered, — I could reunite them — the independence, the affluence which was mine, might be theirs too ... justice would be done, — mutual happiness secured ....
> (Ⅲ, vii)

手のこんだシンデレラ・ストーリーである。しかもジェインは金銭にきたなくはないから、いかにも善人にふさわしい金銭の使い道を知っている。自立とは、額に汗して孜々として働くことではない。働かなくても上品に暮せるだけの経済的地盤をもつことなのである（ここにジェントリーに対する新興ブルジョワの羨望を看取するのは余りに容易である）。棚からボタモチなのか。美徳が報われたのか。

マデイラにいるおじの存在を、ジェインはローウッドを去る直前にそこを訪れたベシーから報（し）らされる。また、ソーンフィールドにいた頃ベシーの夫が遣いに来て、二度と戻るまいと誓った筈のゲイツヘッドへ行くことになり、そこで再びおじの話を聞くことになる。ジョン・リードはリード家を散財したあげく自殺し、母親は心労の余り寝込み、二人の娘はそんな母親を一顧だにしない。通俗的な家庭の悲劇であるが、リード家の誰も同情されるに値しない、という書き方がされている。さて、リード夫人は死に瀕して、三年前にマデイラからジョン・エアがジェインに財産を与えるべくゲイツヘッドを訪れた際、ジェインを憎む余り夫人はローウッドで姪はチフスに罹って死んだと嘘を言ってジョン・エアを追い帰したいきさつを、ジェインに告白する。ジェインはおばを赦すが、おばの心は石の如く硬く、和解成らぬままリード

夫人は息をひきとる。このおじの尽力あってこそ、重婚ともなるロチェスターとの結婚は未遂に終ったのである。しかも、遺産を一人ジェインに遺してくれたから、いとこ同士にあたるリヴァーズ家の三人に、ジェインは報いることもできるのだ。ジェインの前に一度も姿を見せることのないジョン・エアは（したがってその外見は判らない）、ロチェスター家の場合のようなワナに陥れる厭うべき家族ではなく、ジェイン本人の知らぬ窮地を救いかつは富まで与える、まさに歓迎すべき親類である。これほど幸運な孤児もめずらしい、哀れなピップの「大いなる幻滅」と思いあわせてみると。

おばの葬式のあともしばらくジェインはゲイツヘッドに滞在し、ジョージアナとイライザのおよそ褒められたものではない性格をつぶさに観察し、次いで語り手は読者に次のように報告する。

> As I shall not have occasions to refer either to her [Eliza] or her sister again I may as well mention here, that Georgiana made an advantageous match with a wealthy worn-out man of fashion ; and that Eliza actually took the veil, and is at this day superior of the convent where she passed the period of her novitiate ; and which she endowed with her fortune. (Ⅱ, vii)

予告どおり、後続の章ではリード家の人々は一度も言及されない。ゲイツヘッドでジェインを最も辛い目に遭わせたリード夫人とジョン・リードは無惨な死に方を遂げ、残された二人の娘（ジェインのいとこたち）は、ジェインにとっては否定すべき生き方をする。しかし、愛と尊敬の対象とならぬ人々は、身内であってもあるいは身内ならなおさらというべきか、ジェインの知ったことではない。彼らと付き合っても百害あって一利なしなのだ。母方の親戚リード家とはこれでケリがついたのだ。リード家に代わって小説の後半三分の一近くから登場するのが、父方の親戚リヴァーズ家である。彼らは幼くして母親を亡くし、ジェインが彼らに出会ったときには、父親を亡くしたばかりで喪に服していた。繰り返しになるが、リヴァーズ家の三人のいとこたちは、リード家の三人のいとこたちとはまさに対照的である。リヴァーズ家のいとこたちは、ロチェスターの誘惑をしりぞけ三日にわたって荒野をさすらい物乞いにまで身をおとすジェインの艱難辛苦への報いなのだろうか。衰弱から回復するに要する三日とはラザロのそれのように、一種の復活を意味するのだろうか。よきいとこたちの出現は再生のあとでなければならないとすれば ... もしそのような解釈が許容されるなら、おじによる遺産贈与と相俟って、幸運なる偶発事は『ジェイン・エア』のアレゴリー的側面として考慮されねばなるまい。すると ── 偶然などなくなるのである。雀のおちるにも天の意志が働いているとなると。

おじの遺産が入ったのでジェインは、セント・ジョンが世話してくれたモートンの教師の職を退く。かつてソーンフィールドでジプシーに変装したロチェスターに、ジェインは将来の見通しを "the utmost I hope is, to save money enough out of my earning to set up school some day in a little house rented by myself" (Ⅱ, iv) と語ったが、この見通しはシンデレラ・ストーリーに組み込まれようがない。[23] 文学史において新しく、また社会経済史的にも新たな問題提起となった女性の労働、その意味は、ジェインに遺産が入ったことで、あっけなく回避されてしまったのである。

ジェインはマーシュ・エンドで誇るに足る親類と自立するに足る富を得る。しかし、ソーンフィールドで得たロチェスターの愛に代わるべきものを見つけられないでいる。"poor, obscure" ではなくなったが、"plain and little" である。そんなことはないといとこたちは言ってくれるだろうが、ジェインにとっては、自分と同じ魂をもつ異性と結ばれぬ限りは、"plain and little" は彼女の劣等感を刺戟してやまない。ロチェスターの専制的な愛という誘惑のあと、またもジェインは正反対の誘惑にさらされる。自己犠牲を強いる labour の誘惑。すなわち、ギリシア型美青年セント・ジョンの求婚である。彼がジョインを愛するからではなく、ジェインがロザマンドよりもずっと宣教師の妻としてインドで布教活動する彼の有効な道具たりうるから、彼はジェインに求婚するのである。

> God and nature intended you for a missionary's wife. It is not personal, but mental endowments they have given you ; you are formed for labour, not for love. A missionary's wife you must, shall be. You shall be mine ; I claim you — not for my pleasure, but for my sovereign's service. (Ⅲ, ix)

セント・ジョンは神と自然をもちだして、ジェインに結婚を迫る。同じ「口実」に異なる解釈をほどこして、ジェインは反論する、相互的な愛のない結婚など神にも自然にも悖ると。とはいえ、ロチェスターと結ばれる可能

性は皆無に等しいから英国にいても仕様がない、今や裕福なのだから住み込みの家庭教師や学校教師をするまでもない。だからといって、セント・ジョンの妻になったら、彼のいいなりになって異国で死んでも涙も流してもらえまい。ジェインは、ロチェスターとはふざけることができるのに、セント・ジョンには冗談も言えない。進退谷まったジェインは天に祈る、そしてジェインの名を呼ぶロチェスターの声を聞きつけるのである。彼女はためらうことなく翌日ソーンフィールドを訪れる決意をする。これは幻聴ではなく、天が道を示したのだ、とジェインは確信しているのだから。しかもマーシュ・エンドに彼女をひきとめるものは何もないのだ。

『ジェイン・エア』には様々な超自然現象が起こる。ゲイツヘッドにいた頃、リード夫人の命令でお仕置として監禁された赤い部屋でジェインが味わう恐怖は、心理学的に説明がつく。またソーンフィールドでの様々な奇怪事（謎めいた三階の部屋から聞える人間のものとも思われぬ笑い声、ロチェスターの部屋の小火、リチャード・メイスンの怪我、ジェインのウェディングヴェールを引き裂く吸血鬼じみたすがた）は、すべてバーサ・メイスンの存在と所業に帰せられる。いずれの場合も、プロットに組み込まれてサスペンスをもりあげる効果を発揮するが、超自然であるとは看做されない。いかにもありそうなことなのだ。だが夢はどうか。ジェインは、彼女にリード家の不幸を告げるべくゲイツヘッドから遣いに来たベシーの夫の来訪をうける前に、泣く子供を夢に見るのだが、子供の夢を見るとは自らにまた親族・同類に不幸がある兆であると、彼女がまだ幼い頃ベシーが同じ召使いのアボットに語るのを耳にしている。そして、ベシーは自分の妹の死を報らされたというのだ。同様に、ジェインはジョン・リードの自殺とリード夫人の回復することはないであろう病を報らされる——夢を見たあとで(Ⅱ, vi)。複数の人間（この場合はたかがベシーとジェインの二人なのだが）の身に起るとなるとある程度客観性を獲得できるとでもいうのだろうか。この正夢の叙述に先立って、章は次のように始まるのである。

> Presentiments are strange things ! and so are sympathies ; and so are signs : and the three combined make one mystery to which humanity has not yet found the key. I never laughed at presentiments in my life; because I have had strange ones of my own. Sympathies I believe exist : (for instance, between far distant, long-absent, wholly estranged relatives ; asserting, notwithstanding their alienation, the unity of the source to which each traces his origin) whose workings baffle mortal comprehension. And signs, for aught we know, may be but the sympathies of Nature with man. (Ⅱ, vi)

これは重要な前提である。ある種の夢は、人智には量り知れぬ真実を予告する。それは信ずるほかないのである。結婚式前夜に、不安におびえるジェインがロチェスターに語るのは、先夜に見た夢である。子供が泣いている夢、子供を腕の中に抱き廃墟と化したソーンフィールドをのぼり、ロチェスターの姿は消え子供が腕から落ちる夢である（その後に続いた吸血鬼めいたものの登場は夢ではなかった）。いずれも夢の象徴性を保持しつつ、現実と化す夢なのである。メロドラマの枠組みの中で、ロチェスターが不安にみちた夢をジェインの神経の昂ぶりで説明するように、ポスト・フロイト時代に生きる我々もまた、不安や無意識を以て心理学的にあるいは病理学的に分析できもしよう。しかし、語り手もそして作者も、上に引用した箇所に見られるように、予兆を寧ろ自然と人間の共感と捉えていることにこそ、注目しなければならない。人はただ物質世界にだけ属しているのではない。超自然は自然なのである。それを信じるのでなければ、ジェインは遠くにいる筈のロチェスターの彼女を呼ぶ声を聞きつけることも、それに全感覚を揺さぶられることも、それを現実の声と確信することもなかったであろう。この声は、もしジェインがセント・ジョンと結婚することが神の意志と確信できれば彼と結婚しよう、とセント・ジョンに言って天を仰ぐとき、まさに彼女の耳（心と言うべきか）に聞えるのである。したがって、ジェインはこの超自然現象を自然とうけとめ、神の意志の反映と看做すのだ。神と自然とが味方についたとなれば、もう恐いもの知らずである。Ferndean でロチェスターに再会したジェインは彼の口から、彼もまた同時刻に神に祈ってジェインの名を呼び、その嘆願に応えるジェインの声を聞いていたと知る。この文字通りのテレパシーは、人によっては興醒めも甚しいであろう。しかし、真の愛の交感、魂の対話はテレパシーによってしか可能ではないという信念、というか信仰によって支えられているのである、この相互確認は。尤もジェインは、自分もロチェスターの声を聞いた、と彼には告げない。語り手への読者の共感に寧ろ期待をかけている。

（超）自然現象の例をさらにあげよう。夏至の前夜、ジェインはエデン（！）のような庭でロチェスターの求婚を受諾する。すると空は俄にかき曇り、驟雨となる。栗

の木はメリメリと音をたてる。翌日、ジェインは栗の木に落雷があって木は燃えたと知るのである。このときはまだジェインは天の警告の意味を理解できないでいるが、実は重婚となるロチェスターとの結婚への警告である――語りのレベルでは（心理学的には、ジェインがこの結婚を諸手をあげて歓迎できるわけではない不安を暗示しているといえよう）。[24] そして雷に打たれ倒れた栗の木は、のちのロチェスターの不具を予兆するのである(Ⅲ, xi)。また、ロチェスターへの未練ゆえにソーンフィールドを立ち去りかねているジェインの目に、彼女が凝視する月から女性の形象が浮かぶのが見え、それが彼女に "My daughter, flee, temptation !" と語りかける。ジェインは当然というか本能的というか、"Mother, I will" と答えるのである(Ⅲ, i)。危機に瀕してこのように「超自然現象」が起るのを、ただ心理的に説明するだけでは不十分であると思われる。このように、自然と神とが共働して人間世界の物語に働きかけるとは、いかなる事態なのだろうか。しかも、自然と神は殆ど同義となっているのだ。

自然と起る感情、直観は信じるに足るものである、正しいと思うこと（神が認めたまうと信じられること）をこそしなければならない――これがジェインの生き方の根本原理である。self-respect は大事だが、self-sacrifice は自然に反する。selfish になってはいけないが self は堅持すべきである。セント・ジョンとジェインの結婚をめぐる言い争いは、また神と自然をめぐる二人の意見の対立でもある。家庭的な幸福を望むよりも自己を滅却して異国でキリスト教をひろめることこそ、愛のためではなく労働のためにつくられたジェインに神が欲するところである、と戦闘的ピューリタンの典型ともいうべきセント・ジョンは主張してはばからない。だから神に仕える私の手足として私と結婚したまえ、というわけである。神と自然を「口実」にジェインの運命を握ろうとする。ジェインは一見無私と見えるこの信仰の徒の殉教精神に、非キリスト教国に新エルサレムを樹立しようとする野心をみてとる。[25] 彼はこの野心を実現するために、あらゆる人間らしい自然な感情を扼殺するのだ。ここに語り手及び作者の父権的宗教への批判を読みこんでもあながち見当外れとはいえまい。

父権的宗教の最悪の権化、殆どそのパロディとなっているのは（シャーロットにパロディの意識はなかったであろうが）、ローウッドのブロックルハーストである。金銭感覚と階級意識の上に福音主義をのせて，慈善学校の女生徒を苛酷に扱うことが彼女らへの慈善になると言いのけるのである。また、善人ながらも夭折するヘレン・バーンズは、明らかに『ジェイン・エア』が肯定する世界には入れない人間である。ともすれば道徳廃棄論ともなりかねぬ彼女の考え方は、結果的には容易にブロックルハーストの輩に利用され、犠牲を強いられるのだから。しかも彼女は人間らしい感情を否定しようという傾向がある。それは善人として分類されるセント・ジョンについても言えることだ。彼がロザマンドに魅かれながら結婚しないのは、女の誘惑（彼にとっては楽園喪失以来のトポス）に屈して大義のために尽すことを諦めるなど屈辱的である、と考えるせいである。この二人は善人とはいえ、現世の幸福の可能性を求める『ジェイン・エア』の世界には不要なのだ。ただこの二人との出会いによって、彼らとの交通を通じて、ジェインは自然と調和する神を求めることになる。即ち、ロマン派的想像力、自己の拡張、発現を損うことなく、しかも信仰とも矛盾しないような幸福を求めて進むのである。作家シャーロットは、神と自然の調和を『ジェイン・エア』において夢見ていたのではあるまいか。クォールズのヴィクトリア朝小説研究によれば、十九世紀中葉のフィクションにピューリタンの伝統とロマン派の伝統の双方の遺産を受け継ぎつつ独自の文学的展望を見せているものがあるという。カーライルは神と自然とを類義にしている、と。[26]

ジェインもロチェスター同様ロマン派的 self の持ち主であることに異論はあるまい（同類意識を確認するに不可欠なのだから）。しかも二人とも、災厄や苦悩を通じて宗教（父権的宗教ではなくシャーロットが望ましいと看做すような宗教）に近づくのである。今やロチェスターは悔悟せるバイロン的ヒーローとなったのであるから。ジェインに逃げられたあと、ロチェスターは絶望にうちひしがれながらもソーンフィールドにとどまっていたが、収穫の時季に、バーサの放火によってソーンフィールドが炎上し、彼女を助けようとしたロチェスターは果せず、妻は焼死し、彼自身は片腕を失くした上に失明までする。狂った妻が死んでくれたので収穫はなきにしもあらずなのだが、彼の身にふりかかったこの災厄は、簡単に言えば、詩的正義と解せる。因果応報は小説全体を貫く原理であるから。また、肉体の不具は精神の浄化を意味するのかもしれない。火による浄罪とはまた古典的な図式である。[27] これで性愛と信仰の対立もあっけなく消えるのである。というのも、この不幸の後に、徐々とはいえいかに誇り高いバイロン的ヒーローも、ジェインが（そしてシャーロットが）認めるキリスト教に回宗、または帰依するからである。キリスト教化された情熱ならばジェインは歓迎できる（だから、シャーロットはヒースクリフの情熱をおぞましいと考えたのである）。

> ... I began to see and acknowledge the hand of God in my doom. I began to experience remorse, repentance ; the wish for reconcilement to my Maker. I began sometimes to pray : very brief prayers they were, but very sincere ... I asked of God, at once in anguish and humility, if I had not been long enough desolate, afflicted, tormented ; and might not soon taste bliss and peace once more. That I merited all I endured, I acknowledged — that I could scarcely endure more, I pleaded ; and the alpha and omega of my heart's wishes broke involuntarily from my lips, in the words — "Jane ! Jane ! Jane !" (Ⅲ, xi)

ほぼ同時刻に神の意志を伺うジェインに、この声が聞こえる。二人の愛は神によって是認されたのである（それを疑う者こそ不敬の謗を免れえまい）。しかも、バーサはすでに亡いので、二人の結婚は社会の法にもかなうのだ。かくてジェインは家庭の幸福を得る。おじの遺産で社会的に自立した女となった彼女は、不具なるロチェスターの眼となり手となる。もう着せ換え人形などではない。彼女が最終的に得る天職は、体の不自由な愛する夫の世話をする仕事である。女らしいというより母親らしい務めである。あるいは、父の世話をする娘の役割である。そのかいがいしい世話ぶりは、皮肉というか当然というか、ヴィクトリア朝の女性に課される支配的イデオロギーと何ら矛盾しない。終章はその後の十年にわたる相互依存と相互支配の幸せな結婚生活が手短かに語られる。おのが苦悩をことこまかに書きつらねる語りほどに、幸福となったヒロインの現在（実は語り手が「自伝」を執筆する時点）は、おもしろみに欠ける。

結び　「わが谷は緑なりき」

以上、ながながとジェイン・エアの半生をおってきたわけだが、ソーンフィールドをあとにしてからジェインの辿る道には、幸いな偶然が待ち構えている。その代表的な出来事には、二万ポンドの遺産、よきいとこたちの出現、ソーンフィールド焼亡による結婚の障害の全面的解除が数えられよう。すべてがジェインに都合よく働く。[28] 『ジェイン・エア』の物語の中心にあるのは、ジェインとロチェスターのロマンスであるが、このラブロマンスがメロドラマよろしく一度破綻したあと、いきおいアレゴリー色が強まるのである。また「私が、私が」という意識の強い女性の一人称の語りは、あたかも信仰告白の趣となる。したがって、ストーリー内容と語り方の両レベルで、読者に教訓的メッセージが届けられる仕組になっている。私は "poor, obscure, plain and little" な女ではあるが、神を信じ、心の底から共感しあえる男に出会い愛し合い、結婚し、幸せな生活を送っている。どうか読者よ、神を信じ試錬に耐え、あの世ではなくこの世で幸せになってほしい —— このメッセージを届けるにはどうしても優れて目的論的な女性むき世俗的ロマンスの枠組が必要とされた。[29] その枠組を動かすのは、神と自然である。ロマン派的な自然の概念を受け継ぎつつ、神による裁断と恩寵を受け容れる世界、実は余りに神と自然とに依存する世界。

前述したように、『ジェイン・エア』では主要な登場人物は悪人か善人のいずれかである。語るに足る内面、内的自我をもたないというのが悪人の定義となっているからして、一人称の語り手たるヒロインと気の合わない登場人物は悪人たらざるをえない。悪人は最後にはろくな眼にあわない。彼女と付き合える人々が善人となる。しかし、善人の現世での幸福を善人の自己犠牲や殉教よりも高く評価するこの小説にあっては、善人ですら死ぬことがある。生き残って、社会的にも家庭的にも恵まれることが善人の証、神に選ばれしの人の証となる。マーシュ・エンドに辿り着いてからジェインの身に起こる一見御都合主義的な偶発事は、実はジェインの生き方、彼女の選択の正しさを神そして自然が認めた証拠なのである。[30] 神と自然が認めた正しさでなければ、単に社会に通俗的に認められているような正しさであれば、「正しい」と胸をはっては言えないのである。結果で善悪が、そして救済が、判明するのだ。

ジェインが旅路の果に辿り着く場所は、ロチェスター家のマナーハウス、Fearndean である。本文に "quite a desolate spot" (Ⅲ, xi) とあるように、実にうら淋しい、いかにも隠棲場所めいたところである。最終章で、ジェインとロチェスターの十年にわたる幸福な生活が語られると共に、またダイアナとメアリーそれぞれの結婚生活、彼女らとの交流があっさり語られる。気のあう者同士の親密な交際、それこそジェインが幼少より求めていたものだ。すべては実現する。もう "poor, obscure, plain and little" ではない。そうなったのも、彼女自身の成長、経験、そして信仰の所以であると言わんばかりである。ジェインが最初に置かれた状況からして、彼女がより広い社会（少くともソーンフィールドよりは広い世界）に出てゆくことも可能だったろう。『虚栄の市』

のベッキー・シャープのように。尤も、ジェインには才気やユーモアが欠けているからトリックスターにはなれまいし、ベッキーにいわゆる信仰はないから、ベッキーの内的自我は云々できまいが。ジェインは家庭的幸福の中に、自らの場所を見出す。ロチェスターと共に暮し彼の世話をすることに、自らの天職を見出す。マナーハウスの名が示すように、ファーンディーンは非社会的な場である。性別、職業、社会的地位、財産、容貌、年齢が社会的自我を構成するといえるなら、ファーンディーンとはまさに内的自我の棲家である。いわゆる成長小説が社会的自我のなりゆきを描くとき、内的自我を描くのが "Calvinized *Bildungsroman*" の主題となろうか。しかし、その内的自我の「成長」過程は皮肉にも、ヒロインが金持ちになって自立しかつ家庭的にも恵まれる仕組を露呈してしまうのだ。女性が内的自我を保持するには、遊んで暮せるほどの財産、家柄がよくかつ妻に依存する夫、邪魔だてしない親族といった社会的条件を必要とする。強力な社会的後盾が必要なのだ。すなわち、"poor, obscure, plain and little" は最初の与件としてはヒロインの不幸な境涯の「口実」(したがって社会への抗議)となり、ヒロインの成長(小説では場所の移動として描かれる)の契機なのだが、その成長を確認するために最終的には否定されるべき条件である。結果がすべてであるとすれば、"poor, obscure, plain and little" は否定されるべき属性である。ヒロインは現にある社会体制のおかげで社会的地位と家庭の幸福を手に入れる。最初に抗議した筈の抑圧的社会体制を是認したことになる。シンデレラ・ストーリーとして読むときに付きまとう皮肉である。世俗ロマンスの宿命というべきか。ジェインがファーンディーンに至って獲得する家庭の幸福、この閉鎖的空間を成立させるのは、主要登場人物造型に見られる善悪二元論、プロットの目的論的展開、ストーリーの明らさまなまでの教訓的寓意性である。

ジェイン・オースティンはヒロインの内面だの魂だのを持ち出さなかったように、神の名をみだりに口にはしなかったし、神による幸福の承認を得ようとやっきにはならなかった。ジョージ・エリオットのヒロインは、神に祈りはするのだが事の結果を神の意志に帰する類の自信はもちあわせていなかったし、そう思いこむには作者に哲学的または神学的な知識がありすぎた。女流作家でシャーロット・ブロンテほどに神を持ち出す作家を私は寡聞にして知らない。神と自然を持ち出し、(超)自然のはからいでヒロインが幸せになる、そうすることで、女性の労働とか自立といった文学史において新しくまた社会経済史的にも重要な問題は回避される。

始まりにアウトカーストありき。しかし、小説の終りに我々が見るのは、別種のアウトカーストではないのか。家庭の幸福に恵まれ、社会的地位をも手に入れて裕福な充ち足りた生活をしている善人、すなわち生き残った人々。彼らは同時代のイギリス社会のシステムから恩恵はうけるが(ロチェスターはクリオールの娘と結婚して財を成し、かつ父と兄の死で一家の財産をすべて所有できたのだし、ジェインはマデイラのおじからの遺産で自立した女になったのだ)、その社会体制に義務を負うとは意識していない。社会とは隔絶したところで、地上楽園に住んでいるのだ。そこでは時間も流れていないかのようだ。十年の月日が永遠とまごうような世界だ。小説の結びは、これが最後となるであろう死につつあるセント・ジョンの異国からの手紙の一節である。その名にふさわしく、ヨハネ黙示録の一節が引用される。「自伝」と言条、聖書の詩句をちりばめた最終頁で時も場所も消失する。

註

(1) Virginia Woolf, *The Modern Reader* (1925; A Harvest Book, 1953), p.162.

(2) See Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen-Forties* (Oxford: Clarendon Press, 1954), pp. 288−293. ティロットスンによれば、『ジェイン・エア』執筆期に、シャーロットは『アグネス・グレイ』と『嵐が丘』から小説技法を学んだという。妹たちからの影響より寧ろ、(影響をうけたにせよ)シャーロットがどう一人称の語りを『ジェイン・エア』や『ヴィレット』に用いたか、に私の関心はむけられる。Cf. Earl A. Knies, *The Art of Charlotte Brontë* (Ohio U. P., 1969) pp. 106−11.

(3) Eva Figes, *Sex and Subterfuge* (Macmillan, 1982), p.113. なおフィッジスは、Harriet Martineau がパンフレット作者として活躍しながら小説を書くのは寧ろ避けていた事情を述べている(*ibid*, p.114)。19世紀英国に見られる女流作家の輩出については、Nancy Armstrong, "The Rise of Feminine Authority in the Novel" (*Novel*, Vol 15 No2, 1982) から多くの示唆を得た。

(4) Thomas James Wise and John Alexander Symington eds., *The Brontës: Their Lives, Friendships & Correspondence* (1933; Porcupine Press, 1980), II, pp. 178−79. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1857; Penguin edition,

1975), II, iii, pp.336－38. See Introduction to *Jane Eyre*, ed. Q. D. Leavis (Penguin edition, 1966), pp. 10－11. シャーロットはオースティンの作品に、"poetry"の欠如を見てオースティンを評価できなかった。「詩」と「真実」を求めるシャーロットに、リーヴィス夫人はD.H. ロレンスの先駆者を見出している。

(5) Raymond Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (Hogarth, 1984), p.60.

(6) Merryn Williams, *Women in the English Novel 1800–1900* (Macmillan, 1984), p.88.

(7) 『ジェイン・エア』からの引用は、Margaret Smith ed., *Jane Eyre* (The World's Classics : Oxford U.P., 1975)に拠り、その巻数及び章数で示す。拙論ではシャーロットの文体は残念ながら扱わないので、ウィリアムズからの引用箇所とこの『ジェイン・エア』の原文とを比べていただきたく、本文に並べたのである。文体については、Doreen Roberts, "*Jane Eyre* and 'The Warped System of Things'" in *Reading the Victorian Novel : Detail into Form*, ed. Ian Gregor (Vision, 1980) から多くのことを教えられた。

(8) Quoted in Gaskell, *op. cit*, II, i, p.308.

(9) 「予見」と書いたのは、ジョージ・エリオット、トマス・ハーディ、さらにD.H. ロレンスといった作家のことを念頭においているからである。(拙論は寧ろ、シャーロットがいかにして性や倫理といった問題を回避しようとしたかに重心をおくものであるが。)

(10) Letter to G. H. Lewis, November 6, 1847. Wise and Symington eds., *op. cit* pp. 152－53.

(11) See Tillotson, *op. cit.*, pp.285-87.

(12) ロマン派の文脈に孤児をおく場合とユダヤ＝キリスト教の文脈に孤児をおいてみる場合では、孤児のもつ意味あいが異なるという。See Barry Qualls, *The Secular Pilgrims of Victorian Fiction* (Cambridge U. P., 1982), pp.4–5. ヴィクトリア期の孤児は "innocent yet guilty" であるという。『ジェイン・エア』においてヒロインは、常に対人関係を外に向けていられる。いわば楽園追放の記憶からこの小説は始まり、楽園を再復する。対人関係を外へ向けつつ、社会に自らを開くというわけではない。この小説での対人関係とは、実は、社会化を伴わないのだから。ベシーが歌うバラッド(I, iii)がその縮図となっている。

(13) Gaskell, *op. cit.*, I, iv.

(14) *Ibid.*, I, viii, pp.159–60. また、ソーンフィールドを舞台とする挿話に最もアングリアの痕跡が残っているという。Tillotson, *op. cit.*, p.287.

(15) Qualls, *op. cit.*, p.43 & p.83.

(16) Cf. Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (Princeton U. P., 1957), p.151; pp.304–05.

(17) シャーロットは、バーサの方が個人として見ればジェインやロチェスターより遥かに救いのない生涯を送っている、とは考えていなかったようだ。シャーロットにとってバーサは、相思相愛の二人の結婚を邪魔する障害物、その死によって二人を結びつける道具でしかない。バーサの象徴的・寓意的な役割や意義については諸説ある。ロチェスターの性愛の投影とも、ジェインのダブルとも。シャーロットはバーサの象徴性について余り意識的であるとは言えない。Cf. Elaine Showalter, *A Literature of Their Own* (Princeton U. P., 1977), p.28 & pp.118–22; Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic*. (Yale U. P., 1979), pp.359–62. 女流作家の作品にみられる監禁のテーマについては、Gilbert and Gubar, *op, cit.*, pp.83–85. 監禁は既に Maria Edgeworth の *Castle Rackrent* の一挿話でも扱われているし、ゴシックロマンスの常套でもある。私には、Mary Wollstonecraft, *The Wrongs of Woman* が最も印象的である。アングリアにロチェスターとバーサの関係が既に暗示されている。

(18) See Letter to W. S. Williams, August 14, 1848. Wise and Symington eds., p. 244.

(19) Cf. Leslie Stephen, "Hours in a Library" in *Cornhill Magazine*, December 1877, extracted from Allott ed., *Charlotte Brontë* Jane Eyre *and* Villette: *a Casebook* (Macmillan, 1973), pp.151-52.

(20) ブロンテ家のブランウェル、エミリー、アンの「変形」としてのリード家の三人について、Helen Moglen, *Charlotte Brontë: The Self Conceived* (Norton, 1978), p.109 を参照。ブロンテ家の三人の「変形」としてのリヴァーズ家の三人については、Figes, *op. cit.*, p.127 を参照。また、イングラム家の家族構成はリード家と同じである。こうなるともうシャーロットの psychodrama である。

(21) See Q. D. Leavis ed., *Jane Eyre*, p.489. リーヴィス夫人は、シャーロットが『嵐が丘』を書いたエミリーに比べて遺産相続の関する法知識をもっていないことを、この時点で小説はリアリズムではなくお伽話になっているのだから構わない、と説明している。

(22) Cf. Terry Eagleton, *Myths of Power* (Macmil-

lan, 1975).

(23) ジェインの将来の見通しは、のちに『ヴィレット』のルーシー・スノウにおいて実現することになる。伝記的にはブロンテ姉妹は失敗したが。

(24) 自然という外界と心理という内界との照応は、冒頭の11月の陰鬱な雨と幼いジェインの辛い思いとの照応に既にその例を見ることができる。これは心理学的な説明である。

(25) シャーロットには、植民地での布教活動は帝国主義、植民地主義の先兵たりうるという観点はなかったように思われる。カトリック文化圏ではないという理由だけで、英国を優れた国と考えているくらいだから。まして、宗教は人民の阿片などと考えつきもしなかっただろう。

(26) Qualls, *op. cit.*, p.37.

(27) ロチェスターの不具の象徴性や意義についても諸説ある。Knies, *op. cit.*, p.135 ff で幾つか紹介されている。私如きは屋上屋を架する愚を犯すだけであろう。従来、概ね、性、倫理、パワーポリティックスといった観点から批評されてきたと言うにとどめよう。

(28) 多くの批評家がそれを寧ろ弱点をして捉えてきた。例えば H. F. Chorley, Eugène Forcade, Mary Ward, David Cecil. See Allott ed., *op. cit.*, p.45; p.66; pp.158–59; p.169.

(29) See Qualls, *op, cit.*, pp.12–13.

(30) See Barbara Hardy, *The Appropriate Form : An Essay on the Novel* (London : Athlone Press of the Univ. of London, 1964), pp. 61–70.
彼女は、デフォーと比べてシャーロットがいかに神の摂理に依存しているかを指摘する。